

第8章 少年非行

少年非行の問題が、現在我が国において大きな社会問題になっていることは言うまでもない。本財団による前回調査でも、少年による非行動向等を人々がどのように認識しているかを調査している。今回調査では、設問をおおよそ踏襲することで、前回調査の結果と比較することにした。

調査項目は、①少年非行の量的動向、②同質的動向、③これから問題になる少年非行の内容、④問題少年・非行少年に対する大人からの能動的統制力、⑤少年非行の原因に対する見方等、の5項目で、それらに関する人々の意識を尋ねた。

1. 少年非行の量的、質的動向

(1) 量的動向

設問「周囲を見回して、あなたは少年の非行・犯罪が増えていると思いますか」と尋ねた。結果については、前回調査の結果も併記した。

表Ⅲ－8－1 少年非行の量的動向に関する認識；今回と前回 (%)

	増えている	変わらない	減っている	分からない (n.a.)
今回	66.3	20.7	1.6	11.1
前回	54.6	25.3	1.2	18.6

2年前の結果よりも、少年非行が増えているとの認識が増加して、7割近くになった。減っているとの見方は、前回と共通してほとんど見られない。我が国では少年非行が、ここ数年増加し続き、近年さらに加速しているとの認識が、大半の人々の間で共通している。

<男女別>

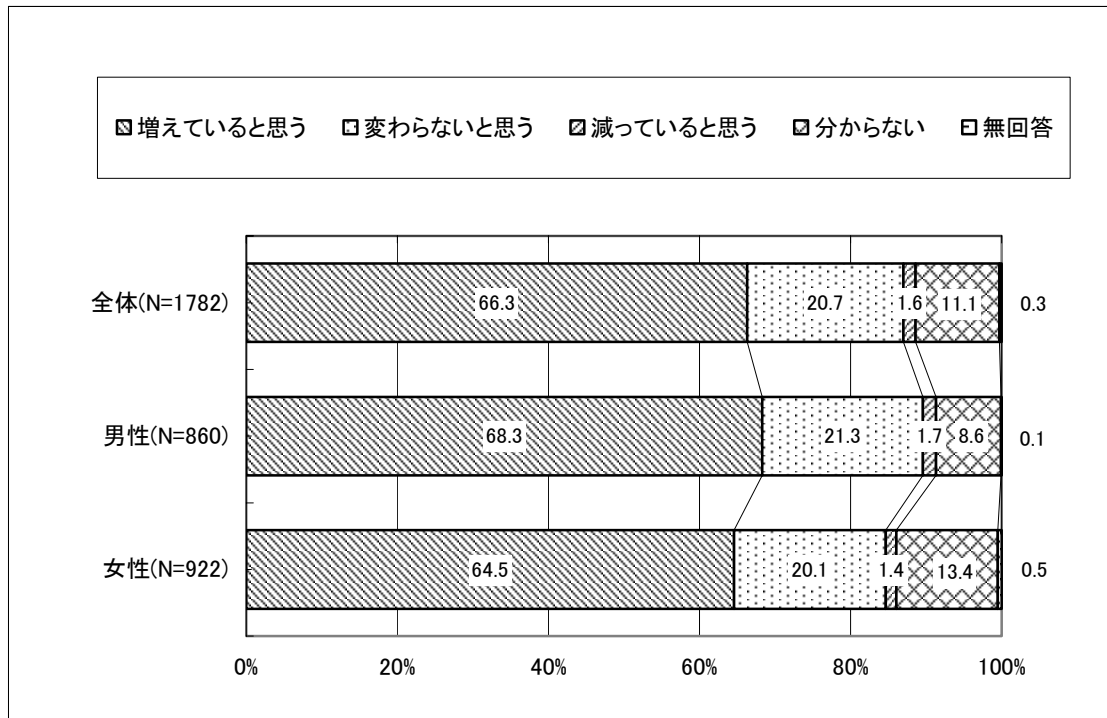
以上の結果を、男女別に比較した。結果は図Ⅲ－8－1（次頁）に示した。

図に見るように、この認識分布は男女間でほとんど変わらない。

年齢別、都市規模別、管区別、等でも回答分布に大きな違いはない。

ただし「増えている」との認識率は、小さい子どもがいる家庭の回答者（12歳未満だけの場合は69.3%、その上の大きい子ども共両方いる場合は71.6%）で高くなる。それに対し、大きい子ども（12歳以上18歳未満）だけの場合は61.6%と低く、小さい子どもがいない家庭の場合は66.0%であり、以上の中間になる。

図Ⅲ－８－１ 少年非行の量的動向；男女別



また、犯罪被害に対する不安量とリスク知覚量を試算し、その量によって回答者を3段階に分けた（第Ⅱ部；調査の結果）が、この段階別によって、この認識は大きく変わる。増えているとの認識は、不安量が低、中、高の順に、58.0%、65.6%、75.8%と上がり、リスク知覚量も低、中、高の順に、58.8%、65.9%、74.9%と上がる。

すなわち少年非行の動向認識に大きく作用する要因として、小さい子どもがいることと、本人が持つ犯罪被害全般に対する危機感が強いほど、少年非行も増えているとの認識になっている。その他、年齢、都市規模、管区別等はこの認識に特別の変化を及ぼさない。

（2）質的動向

設問「周囲を見回して、あなたは少年の非行・犯罪が悪質になっていると思いますか」と尋ねた。結果については、前回調査結果も併記した。ただし選択肢が、今回は「悪質になった」、「変わらない」、「良くなった」、「分からない」、の4種、前回は「悪質になった」、「悪質になったと思わない」、「分からない」の3種である。

「悪質になったと思わない」回答には、非行の質が変わらない意味と、良くなった意味の両方の意を含んでいるが、表では変わらない欄に記した。

表Ⅲ－８－２ 少年非行の質的動向に関する認識；今回と前回

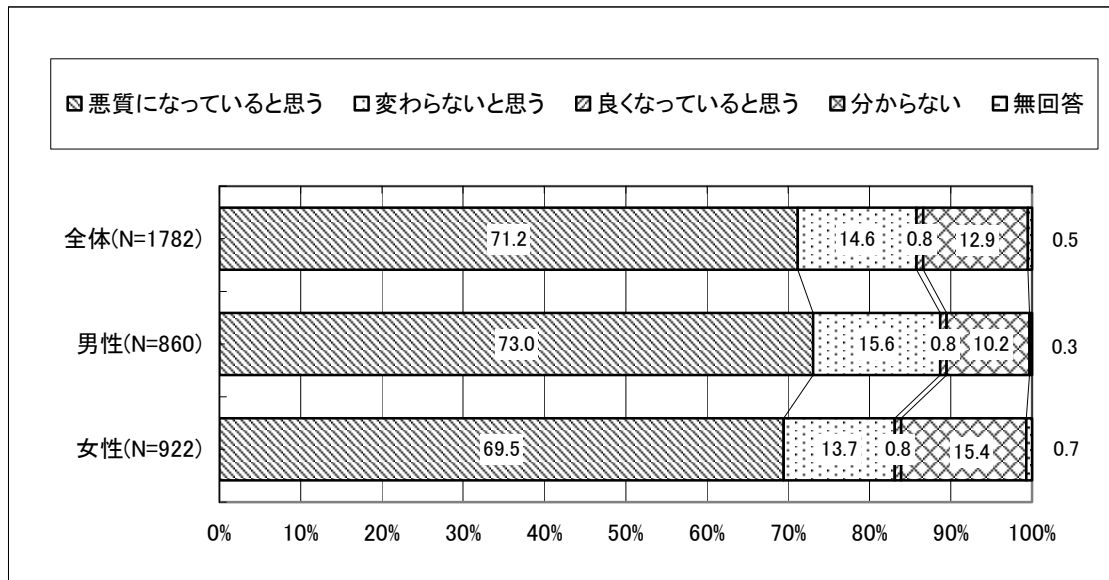
	悪質になった	変わらない (悪質になった と思わない)	良くなった	分からない
今回	71.2	14.6	0.8	12.9
前回	63.4	(9.9)	—	25.9

悪質になったとの認識が前回よりも増え、7割を超える人々の認識になった。我が国の少年による非行が、ここ数年悪質化の方向に進み、この1、2年でそれがさらに加速しているとの見方が、おおよそその人々の共通認識になっている。

<男女別>

以上の結果を男女別に比較した。結果は図Ⅲ－８－２に示した。

図Ⅲ－８－２ 少年非行の質的動向；男女別



結果に見るように、質的動向についても量的動向に関する認識同様、男女間で大きな違いはない。若干、女性の方が分からないが多く、その分だけ悪質になったとの回答が減っている。

年齢別、都市規模別、管区別にも回答分布に大きな違いはない。

子どもの年齢によっては若干の違いがあり、「悪質になった」回答が、小さい子ども（12歳未満）だけの家庭の者からは73.8%、小さい子どもと年長の子ども（12から18歳）両方いる家庭の者からは75.0%、年長の子どもだけの家庭からは68.0%、子どもがいな

い者からは 70.5% であった。子どもが複数いてかつ 12 歳未満がいると、非行が悪質になったとの危機感がもっとも高い傾向になる。

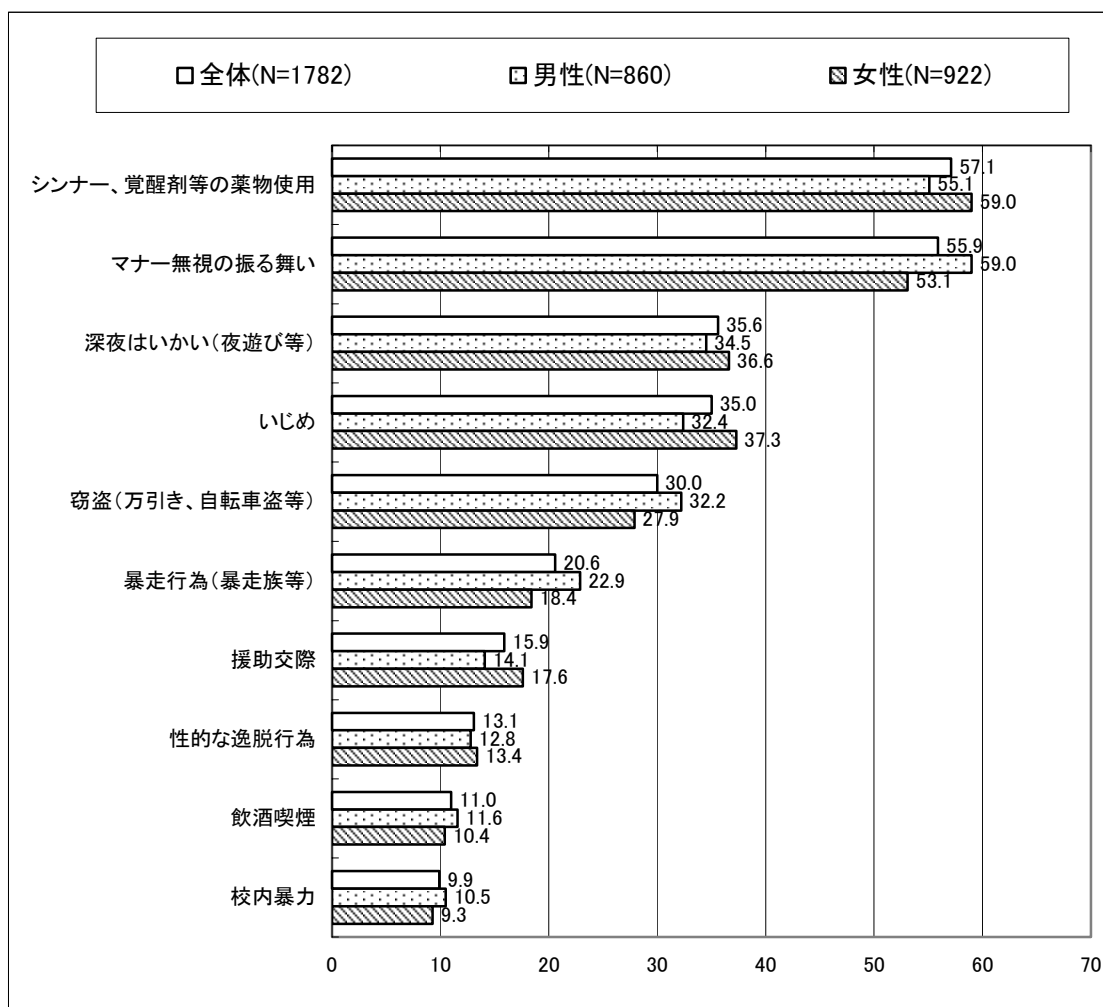
また犯罪被害に対する不安量、リスク知覚量の違いによる違いを見た。悪質になったとの回答が、不安量、低、中、高の順に、63.7%、71.1%、78.9%と増え、リスク量が低、中、高の順に、65.0%、70.4%、79.2%と増えた。すなわち犯罪被害全般に対する危機感が高いほど、非行が悪質化したとの認識になっている。

2. 今後問題になる非行問題

設問「あなたは、少年のどのような行動が、これからの社会にとって問題だと思いますか」と尋ね、10種の行為を示し、最大3つまで○をつけてもらった。

結果は男女別に、図Ⅲ－8－3に示した。

図Ⅲ－8－3 これからの社会で問題になる非行問題（3つまで選択）；男女別



これからの社会にとって問題だと指摘された非行問題で一番多かったのは、シンナー覚醒剤等の薬物乱用 57.1% と、マナー無視の振る舞い 55.9% の2種で、共に過半数の人が指摘した。次いでは深夜はいかい、いじめ、窃盗、等が3割台の人から指摘された。その他の行為については、およそ1-2割の人が指摘したに止まった。

<前回調査との比較>

前回調査でもほぼ同様な選択肢（今回一部変更、追加がある）を設けて尋ねている。ただし前回は、最大2つまで選んでもらった（今回は3つまで）ので、数値をそのままには比較できない。順序だけ見ると、前回もトップはマナー無視 64.9%、次がシンナー等薬物乱用；43.9%、3位がいじめ；27.5%であった。以下、飲酒・喫煙、援助交際、校内暴力、万引き、の順である。

以上の前回結果と今回を比較すると、マナー無視がトップは変わらないが、その他の行為の中で前回よりもさらに指摘が多くなった（絶対値でなく、全体の中の比較から）のは、薬物乱用と、窃盗（ただし前回は万引きだけ、今回は自転車盗を含む）、逆に比較的少なくなったのは飲酒喫煙と校内暴力で、前回と同程度と見られるのは、いじめ、援助交際、などである（深夜はいかいと、性的な逸脱行為は、前回の選択肢にない）。

すなわちこの2年余の間に、薬物乱用と窃盗（自転車盗を含む）が問題性を増加し、飲酒喫煙と校内暴力は問題性をやや減じている。その他は問題性のレベルに変化はない。

<男女差その他>

今回の調査結果について、男女別による回答の違いを検討した。指摘の多かった順序は、男女間でほぼ共通していて違いはない。細かい違いを捜すと、トップになった問題が、男性ではマナー無視になり、女性では薬物乱用になったが、この2種が飛び抜けてトップの2つであることは共通している。その他についても、男女間で大きな違いはない。

年齢差による変化も、大きな違いはない。細かく見ると、年長の男性では、若年層に比べ、マナー無視や深夜はいかい等の指摘がやや多くなり、逆に年長女性は、マナー無視が若年層よりも少ない。

都市規模別では、マナー無視の指摘が大都市でやや多く(61.8%)、町村でやや少ない(55.2%)。逆に暴走行為は大都市でやや少なく(16.2%)、町村でやや多い(22.7%)。

他管区と比べることで各管区の特徴を見るために、行為別に見たときに指摘率が1, 2位に高くなった管区がどこかを見た。北海道は援助交際(21.4%)、いじめ(44.0%)、暴走行為(27.4%)については1, 2位に高くなり、東北は窃盗(35.0%)について2位に高く、東京はマナー無視(66.0%)が1位に高く、関東は1, 2位に高かった行為はない。中部はシンナー等(64.5%)と援助交際(21.5%)が1, 2位に高く、近畿は深夜はいかい(44.1%)が1位、中国は窃盗(36.8%)と深夜はいかい(44.2%)が高く、四国は援助交際(23.1%)が1位、九州はシ

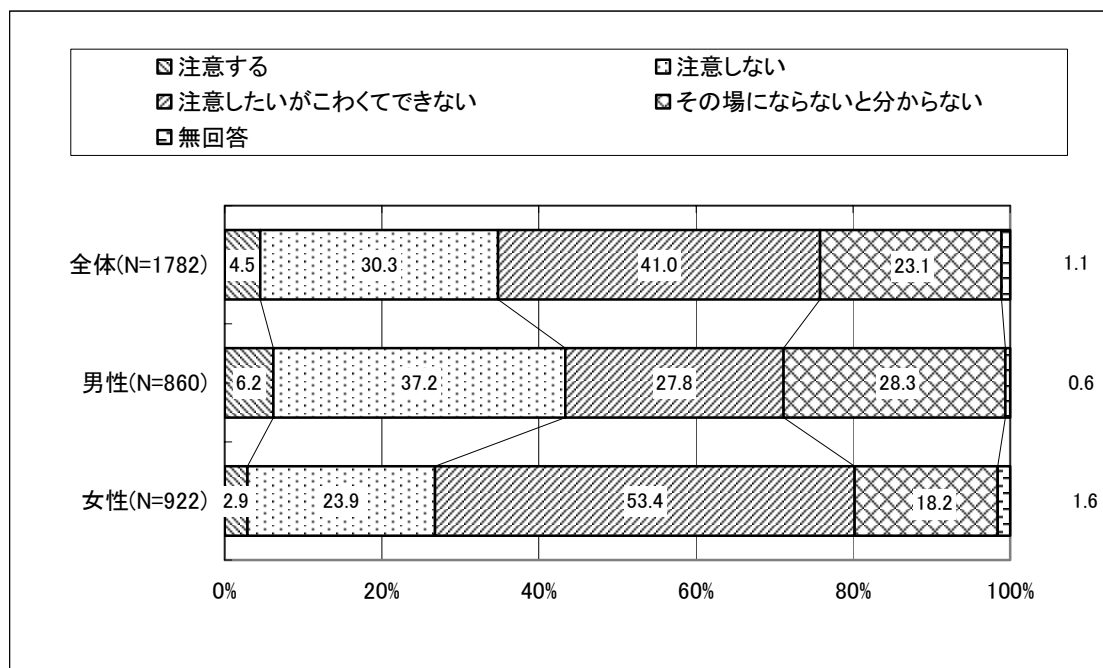
ンナー等乱用(66.3%)が1位、等であった。1、2位に高く指摘した非行問題に関しては、それぞれの住民が他管区の人々よりも、より強い関心・憂慮を持っていることを示すのだから、各管区・地域では、それら民意を考慮した対策が今後求められよう。

なお、犯罪被害全般に対する不安量およびリスク知覚量の多少によって、危惧される非行問題に違いがあるか否かを見たが、特別の関連は見いだせなかった。

3. 少年に対する大人からの注意

少年の非行対策には、大人がたとえ知らない子どもに対しても、積極的・能動的に叱ったり注意できるか否かが問われるだろう。もちろん、注意できる大人が多い社会の方が、いわば非行を抑止できる健全な社会というものだろう。そのような見込みから、子どもを叱れる大人がどれくらいいるかを調べるために、具体的に場面を設定して尋ねた。場面は「見知らぬ少年が、路上でタバコを吸っているのを見たら、注意しますか」と尋ねた。結果は図Ⅲ－8－4に示した。

図Ⅲ－8－4 見知らぬ少年の喫煙を注意するか



全体では、「注意する」は5%未満で、ほとんどの人は注意が出来ないでいる。

「注意しない」人がおよそ3割(30.3%)いるが、この答えの中には、子どもの喫煙・非行を問題にしない人、他人との交渉を極力避けようとする人、人の世話をやくことが余計なことだと考えている人、その他様々な理由があろうが、この範疇の人を、一応「見て

見ぬふり」の人、あるいは無関心派とでも呼んでおきたい。

それらに対して、「怖くて出来ない」答えが 41.0%、特に女性では 53.4% と一番多いことを、どのように受け止めるべきだろうか。先ずその根底に、大人は子どもの非行を注意する必要性もしくは義務があることを認めた上で、しかしそうは思っても実際には、怖くて出来ないのが自分の実情だと観念しているのが、この回答をした大方の心境ではないか。現在の不良行為少年は、多くの大人にとって恐ろしいから避けて通りたい対象なのだろう。あるいはそれら大人が子どもに対して、自信の無さを示すのだと見るべきだろうか。これらの人を単純に「恐がり」の人、または自信欠如派とでも呼んでおきたい。

以上に対して「その場にならないと分からない」答えも多い(23.1%)。これらの大人は、自分のこれまでの経験を踏まえて、実際にその場で相手の少年を見なければ何とも言えないとの、一見穏当な答えだろうが、別な見方をすると、原則を持たず、責任を持とうとしない人でもあろうから、これらの人を一応「日和見」の人、あるいは無原則派とでも呼んでおきたい。

以上のように見ると、現在の大人の子どもの非行に対する態度としては、しっかり「叱る」厳格派が数パーセント、「見て見ぬふり」の無関心派が3割、「恐がり」の自信欠如派が4割、「日和見」の無原則派が2割余、の構成になろう。

<前回調査結果との比較>

この設問は、前回も行っている。その結果を表に記した。ただし前回の選択肢は、注意する、注意しない、その場にならないと分からない、の3肢だけだったので、前回結果と今回結果を直接的には比較できない。

表Ⅲ-8-2 タバコを吸う子どもへの注意；前回と今回比較

	注意する	注意しない	注意したいが怖くてできない	その場にならないと分からない
今回	4.5	30.3	41.0	23.1
前回	4.9	53.7	(選択肢なし)	40.6

表に見るように、注意する人の割合は、前回・今回とも5%を切り、違いがない。この間に、大人一般による少年への統制力が変化・強化せず、むしろ弱化したか、と見なせる。前回注意しないと答えた人と、その場にならないと分からないと答えた人の中には、注意したいが怖くてできないと思っていた人を含んでいたのであろう。

前述の感想を敷衍すると、子どもの非行を注意・叱る厳格派の大人がここしばらく増えることはなく(数値的には少し減少している)、無関心派、自信欠如派、無原則派、の3派がますます大勢になってきているようである。

<その他の分析>

子どもを持っているかどうかは、他人の子どもを注意する・しないと関係しない。

年齢別では、60歳以上の人では注意するがやや高い（全体では4.5%だが、60歳以上は7.4%、70歳以上は9.7%、70歳以上の男性に限れば16.5%）。

都市規模別では、大都市では注意する率が低く2.7%、町村では高い7.3%。

注意する率は管区別では、九州が高く9.8%、一方、中部2.8%、近畿2.1%で低い。その他管区は3-4%台である。

以上の結果に対しては、子どもに注意する率が高いか低いか、それぞれの土地柄、コミュニティの持つ地域の教育力を測る指標になっているように見える。

なお、犯罪被害全般に対する不安量が低い人は、注意するが5.6%、高い人は3.1%、リスク量低い人は5.9%、高い人は2.6%になり、被害全般に対する危機感が低いと、子どもに注意する意欲が少しだけ高まるようである。

以上に見るように子どもに対する大人の統制力は、総じて言えば非常に貧弱で、無関心、自信欠如、無原則な人々が大勢だった。それらに対し、子どもに能動的に注意する厳格派はごく少数だが、その中では、年長（60歳以上）の男性、都市規模では小都市・町村、地方では九州、また犯罪被害に対しては危機感が低い人々において、やや厳格派が多くなっている。

4. 非行原因の見方

設問「あなたは、少年が非行・犯罪に走る原因はなんだと思いますか」と尋ね、15の選択肢を示し、もっとも重要と思うものを3つまで、選んでもらった。結果は図Ⅲ-8-5（次頁）に示した。

一番多かった回答は「しつけ・親子関係」で、76.9%と、ほとんどの人が指摘した。その他は全て2割台以下で、2位は確定しがたい。2割台の指摘があった項目は、離婚など両親の不和、悪い友人、性・暴力等有害環境、子どもの規範意識欠如、子ども自身の性格、の5項目があった。非行原因に関しては、しつけ・親子関係が別格に重要なほか、以上の5項目が同程度に重要な原因と見られている。

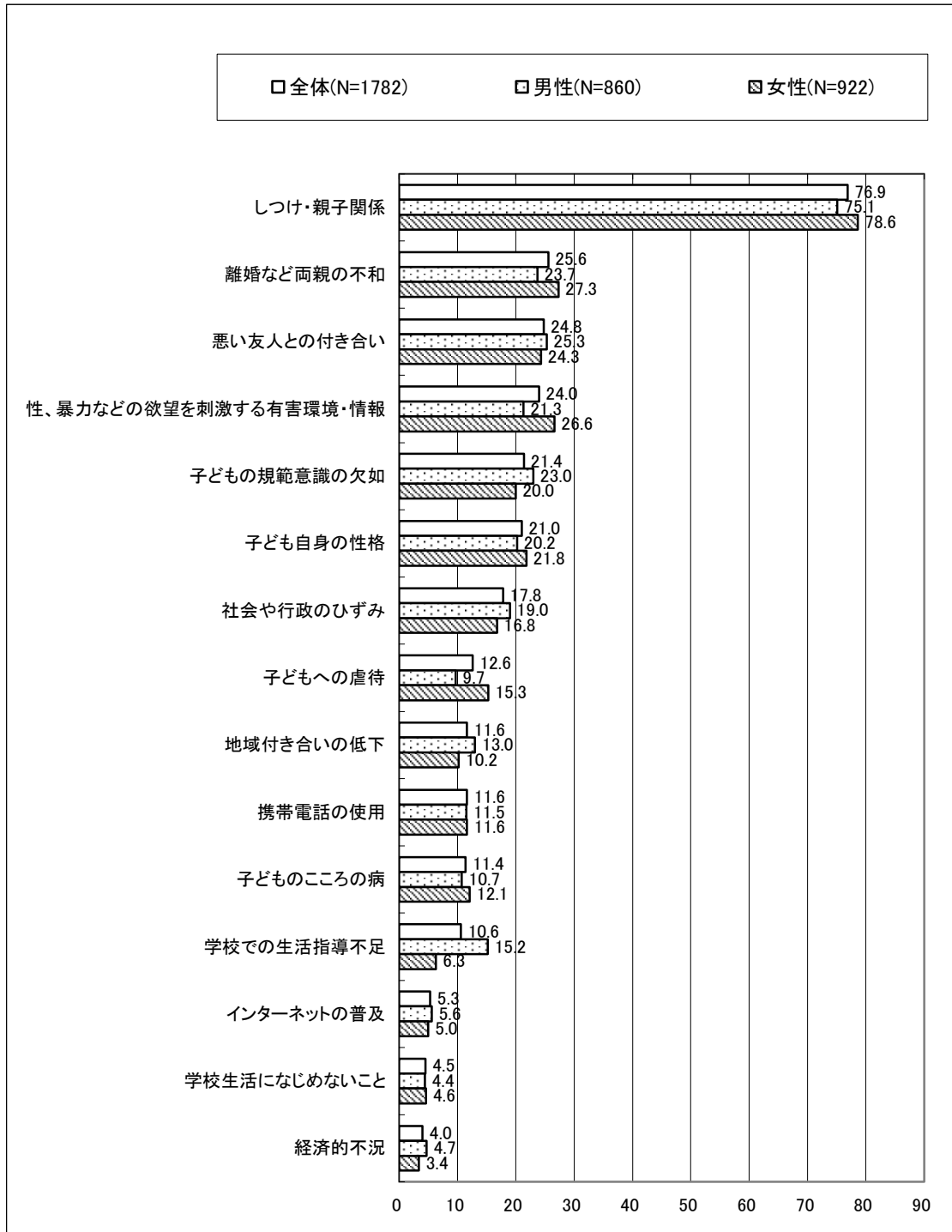
これらの傾向は、男女間で違いがない。

<前回調査との比較>

前回も同じ設問をしているが、選択肢が一部変更したこと、選ぶ数を2つに制限したことから、直接の比較はできない。ただし、第1位は今回同様「しつけ・親子関係」73.3%で、

率においてもほぼ一致している。また上位に来た5項目も今回と変わらない。この2、3年の間に非行原因の見方に、変化はないと見られる。

図Ⅲ－8－5 非行の原因は何か：男女別



＜その他の分析と感想＞

年齢別、都市規模別、管区別、犯罪被害に対する危機感別等でも見たが、回答分布に特別大きな違いはなかった。

以上の結果に対して、若干の感想を加える。以上に見るように我が国の大人は、性別、年齢に関係なく一様に、非行は「しつけ・親子関係」（の不足・不調等）が突出して原因だとの見方になっている。ところでこの見方が昔から、また他の国の人々の見方と共通するか。そのように見ると、若干の違和感がある。現在手元の資料からは、今回調査と全く同じ設問で行った調査を見ることは出来ないでいるが、同じような設問は、これまで多くある。たとえば筆者が参加した古い調査（1979年、総理府、回答者は母親、回答は当てはまる全てを選ぶ）では、非行原因としては「しつけ・親子関係」が非行原因の1位（ほぼ60%）に指摘されていたが、同時に「少年の友人関係」（55%）、「少年自身の心がけ」（45%）がほぼ親子関係に近く指摘され、次いで「マスコミ・地域の不良環境」が3割以上あった。

また世界11カ国の青少年（18歳から24歳）対象の同種調査（1984年、総理府）では、親が原因の1位に揚げられた国が6カ国で、11カ国の過半数になったが、本人、友人、マスコミ等もそれぞれ1位に多く選ばれた国もあり、全体としてみると、非行原因として親が糾弾される割合が突出することはなかった。

要するに、日本の親について最近行った前回と今回調査で、非行原因として「しつけと親子関係」が突出して多く指摘されていることは、やはり近年の我が国の特質であるように見える。その事情としては、大家族が減って核家族と少子化が常態化していること、それらを背景に、濃密な親子の関係が一般化していることが想定されよう。

そのような近年の我が国の事情はともかく、非行の原因はまさに、多様な原因が複合的に関与しているに違いなく、いつの時代・社会においても、何か単一の原因に絞られるべきではなかろう。そのように思うと、しつけと親子関係が突出して問題視されるのではなく、様々な問題・原因にも関心を持って欲しいと思うのである。

もちろん別な見方も可能で、非行の原因はやはり「しつけと親子関係」が基本にあり、それに加えて、友人、社会的不良環境、少年の素質・性格・規範意識、家庭の事情、教育環境、地域環境、さらには社会制度や子どもの生育環境その他、様々な要因が参加して、一人の子どもの非行化への分化を進めているのだと見る必要があるのかもしれない。

そのように見ると今回調査の結果は、我が国の大人においては、非行原因の基本となるしつけと親子関係を確かに認識した上で、両親の不和、友人、有害環境、子どもの性格・規範意識等をほぼ等分に問題視しているのだと理解することが出来る。対策としても、それらの中のどれかに集中するのではなく、等分に対策を講じねばなるまい。

5. まとめ

この章では、非行問題に対する調査結果について、若干の分析結果を示した。

まず、非行の動向に関しては、量的には増加している、質的には悪質化している、との見方が大勢で、減っているや、良くなっているとの見方はほとんどない。この傾向は、前回2年前の結果と同様で、我が国ではここ数年、非行の増大と悪質化の進行が、全国的認識になっている。この認識は、小さい子どものいること、犯罪被害への危機感が高いほど、顕著になる。

今後問題になる非行問題としては、シンナー・覚醒剤等の薬物乱用と、マナー無視の振る舞い、の2つが過半数の人から指摘された。その他としては、いじめ、窃盗、深夜徘徊、の3種が、3割以上の人から指摘された。総じて、不良行為とその周辺の問題だろう。

なお前回調査との比較では、この間に、薬物乱用と窃盗の比重が増し、逆に、飲酒喫煙と校内暴力は、比重を減じている。

以上の傾向は、都市規模の違いによって若干違いがあった。また地域によって、特に問題とする非行内容に違いがあった。

大人から子どもに対する統制力を見るために、路上喫煙の少年に対し注意するか否かを尋ねた。注意する厳格派は数パーセントにすぎず、大多数は注意が出来ないでいる。その大多数を分類すると、怖いからという自信欠如派が4割、見て見ぬふりの無関心派が3割、日和見の無原則派が2割強になった。

子どもに注意する厳格派は、男性の老年層、都市規模では町村、犯罪被害への危機感では低い（少ない）層で、やや高くなる。

少年非行の原因については、しつけ・親子関係を指弾する人が断然多く、8割近い人が指摘した。確かにこの問題が昔から今に至るまで、中心的課題であろう。その他は意見が分かれ、子ども自身の性格や規範意識、友人の悪影響、性・暴力等有害環境、家庭の不安定（離婚等）に、等分に原因の見方が分散した。

この見方については、予定した分析軸によっては、特別の傾向は認められなかった。

以上のそれぞれについて、前回結果との比較と、男女別、子どもの有無別、年齢別、都市規模別、管区（地域）別、犯罪被害に対する不安量・リスク量別に、分析を加えた。